

一 神のお告げ

それは、佛蘭西^{フランス}の國、ムウズ河のほとりの、ドムルミ村のことで
ありました。もの靜かな水車の響は、一日中村の平和をうたつて居
りました。そよ／＼と野の面^{おもて}から吹いて來る風は、花や若草の匂^{におひ}
を運んで薰^{かを}つてゐました。罪に汚れない人の温情^{こゝろ}のやうに、如何^{いか}に
も柔かくさしてゐる日の光りは、人を甘い眠りに誘ふのに十分であ

りました。さうした野の道を、如何にも物思はしさうな顔をして、とぼくと歩いて来る一人の少女がありました。それは、その村の農夫の娘の、ジャンヌ・ダルクでございました。

ジャンヌは、何故そのやうな物悲しい顔をして居るのでせう？まだ年はやうく十六か七に見える少女が、何をそんなに思ひ餘るやうな心配を、その胸に抱いて居るのでせう？

ジャンヌは、今日も亦神またの囁きを聞いたのでした。『ジャンヌよ、早く行け！さうして御身おんみは、佛蘭西國を救はなければならぬ！』

それは初めジャンヌが十四歳じふしになった時のことでございました。ドムルミの村人が、魔法の解かしの木などと稱なへてゐる、ツルイドとい

ふ櫛の木が、聖母の像を安置した祠の傍に繁つて居りましたが、ある日ジャンヌは、何氣なく羊の群れから離れてその木の下に休んで居りました。すると夢ともなく現ともなく、ふと遙かの空に何ともいへない美しい光明がさして、思はず跪いたジャンヌの眼には、まざくと尊い天使の姿が拝まれました。さうして厳かに仰言るには、『起てジャンヌよ！ 神は御身の純潔を選び給ふた！ 御身は佛蘭西の危急を救はなければならぬ！』

ジャンヌはあまりの不思議に、自分の眼と耳とを疑ふほどでしたが、しかしその後もたびく、或は羊を牧つてゐる丘の上に、或は寺院の屋根の空の方に當つて、先の日のやうな光明と天使の姿を認

め、さうして幾度となく、『ジャンヌよ！ 行け、佛蘭西を救ふため

に！』といふ命令おいひつけの聲こゑを聞きました。

まことにその時分の佛蘭西は、國家を顧ることなく、ただく自

分達の利慾を計り、私怨のために相鬭せめぐ黨派の争ひに亂れて、良民

はその財寶たからを掠奪りやくだつされ、田畑は荒され、上からは重い税をかけられ

て、生きた心地もなく雨露を凌いでゐるやうな有様でありました。

国内がそのやうに亂れて、擾亂みだの絶えなかつたばかりでなく、英國

王のヘンリイは、その虚に乗じて佛蘭西全土を我物わがものにしようと、澤

山の軍勢を率ゐて襲い來つてゐました。それは、その祖先のエドワ

アド三世が、當時の佛王ふつおうに御嗣子ごよつぎがなかつたのを見て、母君が佛蘭

西王室の出なのを幸ひ、自ら王位に上らうとして兵を起した、その志こころざしを嗣つがうといふのでありました。

戦争は幾年となく續きました。英軍は戦ふ毎に勝利を占めて進み、佛軍は戦へば必きつと敗れて退きました。佛蘭西に有力な公主は、私の怨みや一身の利害のために英軍の味方であり、その所領の民は佛蘭西方の敵であるやうな有様でございました。剩あまつさへお心の善くない母の後は、現在の生みのお子の、佛蘭西王シャルル七世に復讐の弓矢をむけて、兵火へいくわの中を町といはず村といはずに、英軍を國內に導くのに力を盡つくして居りました。今や佛蘭西の國民は、英佛兩國の王様を戴くことになりました。眞實ほんとの國王であるところの、シャルル七

世の領地としては、ロアアル河以南の地を残すばかりとなつてゐました。

人は母の胎内たいたないからその戦争の話を聞かなければなりませんでし

た。ドムルミ村は、血腥い風が吹くにはあまりに遠く、村人は比較

的平和に暮せたのでありますけれど、戦争の餘波よはは猶此地方にも漂

ひよつて、脱走兵や旅僧などが、味方の敗北を齎もたらして來るたびに、

人々は徒らいたづに國家の不運を嘆き悲しむのであります。國を思ふ念

の人一倍強いジャンヌは幾度神に熱心な救ひの祈禱おいのりを捧げたこと

でせう！

『ジャンヌよ、行け、神のみ意こゝろによつて佛蘭西を救ふために！』と

神のお告げはあつても、ジャンヌは一人の孱弱^{かよわ}い農夫の娘に過ぎませんでした。どんなに愛國の血潮がその胸に燃えても、太刀^{たち}を持つことも、馬に乗ることも心得ぬほどの少女が、どうしてそのやうな大任を果すことが出来ようかと思ひ惑ふたびに、ジャンヌは神のお告げを我心^{こころ}の幻影^{まぼろし}ではないかとさへ疑ひました。けれどももとより信仰の厚いジャンヌのことではあり、且^かつは、その後もたびく自分を勵^{はげ}ます天使のみ聲と御姿に接して、初めて自分の使命を悟り、さうして堅い決心をするやうになりました。

けれどもジャンヌの人知れない苦勞も亦そこにありました安^{やすら}か^{また}けれどもジャンヌの人知れない苦勞も亦そこにありました安^{やすら}かに生^おひ立てよ、その行末^{ゆくすゑ}に幸ひあれとばかりに、神の恵^{めぐ}みを教へた

母も、たとへ神のお告げであるとはいへ、ジャンヌがそのやうな大望を抱いて居ることを知つたならば、どんなに恐れたり悲しんだりすることδεうか。ジャンヌ自身にしても、糸を紡ぐ優しい業わざを捨て、可愛い小羊の群れに別れて、世にも怖ろしい人の血の流れを見なければならぬといふことは、並大抵な決心で出来る業わざではないのに違ひありません。

決心はしても、さすがに猶躊躇ためらはれる心こころを、熱心な祈禱いのりによつて救はれようとしてゐるうちに、年はたび／＼來ては逝ゆきました。今日といふ今日こそ、天使のみ聲は怒りに慄ふるへて、徒らいたづに逡巡しりごみして、時を移してゐるのを責めるかのやうにさへみえました。その方法も

閃^{ひらめ}くやうにジャンヌの胸に宿^{やど}りました。ジャンヌの決心はいよく強く、動かすことの出来ないものとなりました。

その日ジャンヌの家^{うち}では、三人の娘の婚禮の支度^{さしづ}に忙しく、父親はそわ／＼と召使^{さしづ}ひどもに指圖^{さしづ}などをして居りましたが、ジャンヌのものはしさをうな姿が、家の窓近くに覚えて來たのを指さして、急に眉^{まゆ}を曇^{くも}らしてその妻に語りつゞけました。

『あの子のあの容子^{やうす}をござらん。わし達^{たち}がこんなに氣を揉^もんで、目出度い婚禮の晩を待ちあぐんでるのに、丁度まあこの世の中に喜ばしいことも楽しいことも、またあらゆる祝ひごとが、みいんな残^をらず影をひそめでもしたやうに、なんといふ悲しい顔つきをして居^をるの

だ。何が悲しいというてあんなに鬱ふさいて居るのやら、何が不足であんなにも寂しい顔つきをしをるのやら、なあ、あの子は外ほかの姉達あねだちのやうに、配わけられた田地の禮をわしにまだ言はうとはしませぬわい。あの子はふだんから家内の者が笑ふことを笑つたこともなければ、他ほかの娘衆の喜ぶことを喜んだこともないのだ。ひまさへあれば何やらお祈りをしよるやうだが、どうせあの子が祈るやうな願ひは、碌ろくでもない大それたことおほに違ひがあるまい。あゝく、おぬしはとんだ娘を生んでくれたものぢや。』と溜息をつくのでした。

母親の顔にも、争はれない憂慮しんばいの色がみえましたが、それでも猶取り做し顔とに、『でもあの子は村の褒め者ほでござんす。人並優れたの

は縹緖きりやうばかりではないと噂うはさして居ります。素直な心に、人一倍

へりくだ

謙遜けんそんすることも知つて居ります筈、親の慾目よくめかはしれないけれど、私

はどうもあの子に不思議な力が備そなはつてのやうに思ひます。それ貴方あなた

おろ

がいつもお言ひの通り、あの子が手を下せば、どんなに猛々たけんしい家

畜ふでも、すぐにおとなしうなるではありませんか。あの子が手に觸

みの

れた作物は、實みのりがよいとも仰言つたのを私は覚えて居ります。

このやう

とく

あの子が此頃神様にお親しみ申すのも、それはあの子の徳でござい

ませう。私はたび／＼あの子が丘の上にたつて、澤山な羊の群れに

いっしん

かこまれて、一心にお祈りをしてゐる姿を見ましたが、それはあ

かうん

子が女神ではないかと思はれるほど、あの子の姿は神々しくみえま

した。それといふのも、みんなあの子の心が清いからでございませう……。』

『いやく、それが神を冒おかしてゐる証據しょうこだ、オゝ神様！ 此家このやの門かど

を護まもらせ給へ！ わしは夢を見たがナ、思つても恐ろしい夢を見た

がナ、此間のほぢうから三度までもそのおんなじい夢を見たのだ。あの

子が王位のぼに上つたところの夢をぢやないか、輝く星を鏤ちりばめた黄金こがねの

冠かんむりを戴いたいて、手には白百合を彫つた笏しゃくを持つて居つたわ。その膝ひざ

許もとにはこのわしをはじめ、あの子の姉妹きやうだい、皇子様方、伯爵様も大僧

正も、恐れ多い陛下までが、あゝ勿體もつたいないともなんと、あの子の

前に跪ひざまづいて居られるではないか、それが恐い夢でなうて外ほかに何が

あらうよ、凶い前兆だ、わる しらせ どうしてそんな榮華がこの百姓の家に來こうがあらうよなあ。必きつとく何かの悪い前兆にちがひないのだ。』と父親は思ひ餘つたやうに嘆息をするのでした。『わしはもしもあの子が、假かりにも思ひ上あがつた望みを抱くやうだつたら、いつそのことあれを河の中にぶち込んでしまはうと思ふのだ!』

此時丁度、一人の年老いた旅僧が、杖の頭たびそうに珍かしらしく立派な兜を乗せて、とぼくと通りかゝるのを父親は見ました。

『もしく、旅のお坊様、あまりお急ぎの旅でもないなら、ちと足の疲れをやすめてお出いでなさりませ。』

『これはく御親切に忝かたじけない。ではちよつとの間休ままして貰ひま

せうか、やれ／＼ひどくくたびれましたわい。』と旅僧は軽く會釋えしやくを

して庭先からはひつて來ました。

父親はその容子やうすをつく／＼とみて、『どうしてお坊様、そんな恐ろ

しげなものをお持ちなさります。貴方のお身分にはちつとも用のないものではござりませんか。』

『あゝおてまへはこの兜に御不審なされますかい、さて／＼わしも

さうは思ふが、此品これが手に入いつたといふのも、不思議といへば不思議

な話ぢやわい、まあその美しい可愛かあいお娘御むすめごも聞かしやれ。』と、

惹ひきつけられるやうにそこにはひつて來たジャンヌに言ひました。

『わしがこのほどヴォオクウラルを通りかゝると、市中しちゆうは丁度泥どろ

田を覆すやうな豪い混雜ぢや、はて何ぢややら思うて聞いて見れば、
負け戦さの知らせを持つて、落人達おちうどたちがオルレアンから逃げて來たの
ぢやといひますわ。ところへ豫言者よげんしやのやうな格好をした一人の女が、
これこの兜を手を持つて驅かけて來ましたぢや、わしの顔をじろく
みて居たかと思ふと、いきなりこれをわしの鼻先につきつけて、「さ
あお買ひなされ、貴僧あなたがこの兜をお探したのはようつく知つて居り
ますほどに。」というて、無理にわしの手に握らせようとするのぢや、
わしはあまりの不意にあつけにとられてゐたが、「これはく〜とん
だお門違ひぢや、これこの身に纏ころもつた法衣をようくごらんなされ。」
と行過ぎようとすると後追ひかけて、「今日此頃の有様では、何者ぢ

やというて兜が要らぬとは申されませぬ。頭の上の鋼はがねの屋根は、石

の屋根よりも大事ぢや。」というて、しつこく蹠ついて來ますわい。

無體むたいな押賣おしうりに腹はたつたが、つい釣つり込まれて手に取つてみると、

これこの通り造つくりといひ、何といひ、珍めづしく見事な兜なので、うつ

とり見惚みとれてゐたと思はつしやい、折せから何に堰せかれた群衆かしら

ん、どやくと一度になだれを打つて來たので、思はずよろくと

した途端はづみに、兜賣りの女の姿はもう見えなくなつてしまつたのぢ

や。』と旅僧は物語りました。

熱心に耳を傾けてゐたジャンヌは、先程から魅せられたやうに暫くその兜を眺めてゐましたが、やがて靜かに進み出て言ひました。

『その兜を私に下さいませ。』

その言葉に顔色を變へて驚いたのは父親でした。

『これジャンヌ、お前は氣でも違ひましたか？』

『いゝえ、その兜はどうやらわたしのものゝやうな氣がいたしました。』とジャンヌは思ひ込んだやうにきつぱりと言ひました。

『まあ置いときなされ、先刻さつきからこのお娘御むすめごの雄々をいしい容貌かほかたちをみる

につけ、何ぢやゝらこの兜をその頭に載せてみたうてなりませなん

だ。わしがいつまで持つて歩いたとて、重いより外ほかには用のないも

のぢや、こちらの主人の親切な心へのお禮として、わしは喜んでこの

兜むすめごをお娘御おくりものに贈物しませうわい。』

旅僧は靜かにジャンヌの髪の後れ毛おくを搔きあげて、その兜を載せてやりました。黄金の眉庇まびさしに暮近い日の光りがさして、ジャンヌの顔は輝いて見えました。

『したがまあ、親御様達も褒めておやりなされ、勇しい騎士の出陣の姿のやうに、なんとまあよく似合ふではないか。それにつけても、わしは昔の豫言が思ひ出されてなりませぬわい。「婦人によつて失はれたる國は、婦人によつて回復されねばならぬ。」となあ、御非道なお后様が、英國の小さな王様を援たすけて、現在御自分の懷にお抱きなされた陛下を、佛蘭西の王位から除かうと戦つて居られる情けない世の中ぢや。この佛蘭西の國土を、英吉利馬イギリスうまの蹄の下から取返し

て、陛下のおん頭かしらに帝王の冠を捧げ、香油をそそぎまつるのは、殊ことによつたらこのやうに年若をなごな女子であるかも知れませぬわい。』

ジャンヌの眼は輝きました。旅僧が何氣なく言つた言葉であるけれど、それは自分を置いて他に誰でありませう！ 神は佛蘭西を救ふ爲しやうじやうに、清淨なな處女なのジャンヌを選ばれました。ジャンヌは今こそ此世の情實なさけや羈絆きづなを絶つて立たなければなりませんでした。

『してお坊様、戦いくさの模様はどんなでございます？』

『さればさ、敵に味方するブルゴンデイ公は、部下の兵どもを悉じんじんく引率ひきつれて、總大將のサルスベリイに力を合せ、數限りもない大砲や劔けんを揃そろへて、たゞ一打ひとちにオルレアンを陥かこれようと圍かこみの眞最中まんなかで

じやうくわく

ものみ

すわい。城廓の外には高い望樓をつくつて、市中の隅々まで、蟻が這ふのも見逃すまいと見張つてゐる中に、袋の鼠も同様なオルレアンの人々は、援軍の來るのをたつた一つの希望のぞみにして居るのぢや、わしはかうして話す間も氣が揉めてならぬほど、オルレアンは危急ききふに迫つて居るのぢや。あゝ神様、もしもあなたの御意みこころに叶ふならば、どうぞしてこの佛蘭西國を救はせ給へ！』

『そして、陛下には今どのやうにして渡らせられます？　オルレアンに援軍は差向けられたのでせうか？』

しんばい

ジャンヌの熱心な質問は、父親を益々憂慮しんばいに導きました。『女子供がそのやうなことを聞いてなんとします。ジャンヌよ、少しお謹み

なさい！』

ジャンヌは此時凛^{りん}として言ひました。『いえ　お父様、今は國家の
一大事でございます！』

『援^{たす}けの軍勢を呼び集めようにも、たび／＼の敗^{まけ}軍に怯^{おち}氣ついた兵
どもは、誰一人として應ずる者がなく、將官の號令は空^{から}虚に響くと
いふやうな有様ぢや。陛下には今、傭兵どもの俸給にすらお差支へ
であらしやりますげな。なんと御主人、もしもあのオルレアンが敗
れたなら、わしらはお互にあの外國の王様にかしづかなければなら
ないのぢやなあ。』

ジャンヌの嘆息の聲は、暫くにして憤怒の面ざしに變つて行きま
した。

『えゝ言ふも聞くも恥辱ちじよくなそのやうなことは假かりにも仰言います
な。神様は救ひの少女をこの佛蘭西に下し給くだはりました。驕おごりに驕
つた敵の武運は、間もなくオルレアン城下の露と消えてしまひませ
う。み空の星の光りも隠すほど輝いた英吉利の勝利は、やがて佛蘭
西の名譽となるであります。あゝ神様は救ひの少女をこの佛蘭西
に下し給くだはりました！』

ジャンヌの眼は輝き、その頬は紅に燃え、これが農夫の娘のジャ
ンヌであるかと思はれるほど、その姿は神々かうがうしく見えました。自分

さへも豫期しなかつたほどの勇氣と自信にみち／＼たジャンヌがそこにあり、無口な娘のものはしげな顔は、過去の中にその姿を没してゐました。ジャンヌは絶えず我骨ともなり肉ともなつて、身内に囁く聲があるやうなのを覺えました。『行け、行け、ジャンヌよ！ 神は御身を援けるであらう！』

それはたゞ一つの武器であるところの勇氣でありました。

心持喘ぐやうな息を赤い唇の間に通はして、馴れない旅にほんのりと頬を上氣させながら、もの寂しい村道を頻りに急いで居るのは、人知れずドムルミ村をぬけ出したジャンヌでありました。ジャンヌ

が家出をするのを恐れて、家の人達は片時も眼を離しませんでしたが、ジャンヌの堅い決心はとう／＼その隙を捕へることが出来ました。昨日の優しい羊牧ひの少女は、ひっじかをとめ國難を救はうとする健氣な今日の少女でありました。病氣にもなりさうなほど自分を氣遣つてゐる父母がジャンヌの姿が見えないと知つた時の、驚きや嘆きを思ふと、急に胸は波だち、息切れがして自づと足がとまつてしまふやうなこともありましたけれど、危機に迫つてゐる佛蘭西の運命を思つては、二歩の足を一步にもしたいほどジャンヌは先を急ぐのです。路傍みちばたの草花は常の如くのどかに笑ひ、蝶々てふくはその美しい翅はねを暢びやかに舞はしてゐました。それらは國の大事も知らぬ顔に、春を賛美さんびして

るやうに見えました。

ジャンヌが今辿りつかうとしてゐるヴェレエ村には、ジャンヌを大層可愛いがつてゐた一人の叔父さんが住んでゐました。叔父さんは出し抜けた姪の訪問にひと時は吃驚^{びっくり}して立つてゐましたが、堪^{こら}へることが出来ないやうな喜びの情を、その両手に籠^こめてジャンヌを迎へました。けれどもジャンヌは、いつものたわいもなく子供らしいジャンヌとは違つてゐました。ジャンヌはヴォオクウラルの知事のポオドリクウルに會つて、そこから陛下のもとに送つて貰はうといふ希望を、この叔父さんに援けて貰はうとして、はる／＼こゝまで辿りついたのでした。

叔父さんはジャンヌの決心を聞いて、口も塞がらないほど馬鹿に驚きましたが、その熱心と勇氣にも亦驚かされました。とう／＼この叔父さんは、ふだんから信じ愛してゐる姪のために、一臂いちびの力を添へることを約束しました。

その翌日、ジャンヌは叔父に連れられて、知事のボオドリクウルの御前ごぜんにでました。何卒陛下のもとに送つて下さるやうにとの願ひを、逐一ジャンヌから聞いてゐたボオドリクウルは、やがて劔もほろ／＼に叔父に向つて言ひました。

『そんな、狂氣きちがひの娘は、早く親許に送りかへしたがいゝだらう！』それはジャンヌの使命に酬いられた第一の侮辱の聲でありました。

そしてそれはまた、堪へ忍ばなければならぬ困難の、最初の試験でございました。けれどもジャンヌはすべてを覺悟してゐました。知事の冷遇も、いつかはジャンヌの熱心に解ける時が來なければなりません。

神様に祈禱する^{おいのり}ことゝ、ボオドリクウルを動かすために出頭することを勤めにして、ジャンヌは暫く親切な叔父さんの家にとゞまつてゐました。するうちにいつかそのことが市中の評判になつて、人々はその神より遣はされた少女^{をとめ}を見ようとして、叔父の家の^{のき}檐を賑はしてゐました。そしてみんなが噂さしました。

『なんといふいゝ娘さんだ、ちつともたかぶらない、ちつとも飾ら

ない、それでゝあの氣高いことは！ あゝ佛蘭西はあの娘さんによつて救はれるにちがひない！』

人民の信仰と、ジャンヌの熱心は、とう／＼頑固なボオドリクウルを動かしました、その終りの日に、ジャンヌは長い間堪へて居た齒痒ゆさを洩らして、少し腹立だしさうに言ひました。『知事様、わたしは憚りなく申しますが、貴官は私を陛下のもとに送るのがあまり遅うございました。今日陛下の忠義な味方は、オルレアンの附近で大敗北をいたしました。』

間もなくその敗軍の知らせが傳はりました。さすがのボオドリクウルも、ジャンヌの不思議な力の前に屈しなければならなくなりま

した。馬や、衣服や、軍用品が用意され、ジャンヌを陛下のもとまで送る駿馬しゅんめは、晴々しい朝の空に向つて高く嘶いいてゐました。その聲は更に新しい勇氣をジャンヌの満身に漲みなぎらせました。

あゝ！ 佛蘭西はまさに救はれようとしてゐます。

目次に戻る

公開…令和三(2021)年八月十五日

改訂…令和五(2023)年三月七日

【入力者注】以下の修正を施しました。（数字は底本のもの）

9-7 躊躇ためらはれる必ころ、 ↓ 躊躇ためらはれる心ころ、

19-8 英國ちひの小さな王様たすを援たすけて、 ↓ 英國ちひの小さな王様たすを援たす

け、